

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

2012年から続いてきた長期ドル高・円安トレンドが、今年に入って終了したと判断し、調整の長期ドル安トレンドに入ったものの、5月3日の105円台への下落で一旦下げ止まり、反発することによって105円～115円のレンジ相場継続をこれまでのメインシナリオとしてきました。

【ドル/円 週足】



しかし、米国の早期利上げ観測の後退と英国の欧州連合（EU）離脱をめぐる不透明感が市場のリスク回避意識を高め、日銀による追加緩和が見送られたことにより、ドル/円相場は105円を割れ、一時103円半ばまで下落しました。

英国の国民投票の結果は、世界経済に大きな影響を与えるものと考えられ、為替相場もこの結果に大きく左右されるでしょう。

EU残留という結果となればポジション調整の円安が期待できますが、110円が既に遠い壁となっているように見えます。

EU離脱となれば、さらに円高が進みドル/円も100円割れを試す動きが予想されます。

ただし、その場合には日銀による介入の可能性が高いこと、過去10年で見ると52週移動平均を下回った相場は約14%程度の乖離幅で底を売っていることなどから、100円割れを試したとしても、そこから更に円高がどんどん進むと考えにくく、当面は100円～107円レベルでの取引となる可能性が高いと考えます。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、日銀が追加緩和を見送ったことや英国の EU 離脱を材料とした投機筋の仕掛けにより 105 円を割り込み、103 円 55 銭まで下落しました。

今週も英国の国民投票が最大の焦点となるでしょう。

結果は日本時間 24 日の午後に判明する見通しですが、直前まで数多く発表される世論調査の結果やブックメーカーのオッズに一喜一憂し、振り回される相場が続くでしょう。

離脱の場合は、リスクオフの加速で円高となり、一気に 100 円を意識する動きとなる可能性もあるでしょう。ただし、既に投機的な円ロングが積み上がっていることを考えると瞬間的に円が急騰しても利益確定や材料で尽くしの動きで値を戻す可能性も高く、100 円～105 円でのレンジを想定します。

また、ポンドやユーロの急落に対応するため、英・米・日など各国による協調介入の可能性も否定できず、注意が必要でしょう。

残留の場合は、積み上がった円ロングの解消により、離脱懸念が騒がれ始めた水準である 107 円程度まで戻っておかしくはなく、その場合は 103 円半ばが当面の底となる可能性もあるでしょう。